

第7章

# ディスカッション活動

# 1 ディスカッション活動の概要

## (1) 目的

ディスカッション活動は、各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業終了後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせるとともに、参加青年（PY）に具体的な事後活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

## (2) テーマ

本年度のディスカッションでは、日ASEAN友好協力に関する共同ビジョン・ステートメント2023実施計画（2023年12月17日）にて各国首脳が合意した事項を基に、6つのディスカッション・テーマを設けた。PYは、ディスカッション・テーマごとに各国ほぼ同数のPYで構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

### ディスカッション・テーマ

- DG1 質の高い教育
- DG2 経済成長と持続可能で責任ある観光
- DG3 地球環境と気候変動
- DG4 防災と復興
- DG5 社会福祉と包摂的な社会の実現
- DG6 デジタル社会と人工知能（AI）

## (3) 実施方法

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定した。所属DGの決定後には、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各ディスカッション・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施し、日本の事例を学び、各テーマに対する知見を深めた。

船内活動では、各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、各DG及び各国で選出されたPY運営委員がファシリテーターを補佐した。

シンガポールにおける訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、ディスカッション・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における理解を深めた。

DGごとに7回のセッションを行った後、PYが事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。これは、事後活動セッションI（全体会）の中に組み込まれ、各国事後活動組織代表者と協力して実施した。

今年度の成果発表会はディスカッション活動運営委員会によって運営され、各DGがセッションで議論した内容や学びをまとめ、プレゼンテーション方式で発表した。各発表終了後、他のDGのPYが発表内容に関するコメントを述べた。

## (4) ファシリテーター

| ディスカッション・グループ        | 氏名 | 国籍     |
|----------------------|----|--------|
| DG1 質の高い教育           |    | フィリピン  |
| DG2 経済成長と持続可能で責任ある観光 |    | フィリピン  |
| DG3 地球環境と気候変動        |    | フィリピン  |
| DG4 防災と復興            |    | 日本     |
| DG5 社会福祉と包摂的な社会の実現   |    | シンガポール |
| DG6 デジタル社会と人工知能（AI）  |    | ネパール   |

## (5) プログラムの流れ

|                                                                                     |                      |                                        |
|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|----------------------------------------|
| 乗船前                                                                                 |                      | PYの希望に基づき、所属グループを決定<br>PYは各国にて事前課題等の準備 |
|    |                      |                                        |
| 日本国内活動                                                                              | 1月21日<br>10:45～12:00 | グループ別ミーティング<br>(ディスカッション活動運営委員の選出)     |
|                                                                                     | 1月22日<br>9:15～12:00  | 導入                                     |
|                                                                                     | 1月23日<br>9:00～17:00  | ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施              |
|                                                                                     | 1月24日<br>9:15～11:45  | グループ・ディスカッションI                         |
|    |                      |                                        |
| 船内<br>ディスカッション活動                                                                    | 1月29日<br>9:45～12:45  | グループ・ディスカッションII                        |
|                                                                                     | 1月30日<br>9:45～12:45  | グループ・ディスカッションIII                       |
|                                                                                     | 2月1日<br>9:45～12:45   | グループ・ディスカッションIV                        |
|                                                                                     | 2月2日<br>9:45～12:45   | グループ・ディスカッションV                         |
|                                                                                     | 2月3日<br>9:45～12:45   | まとめ、成果発表会準備、自己評価                       |
|  |                      |                                        |
| シンガポール<br>訪問国活動                                                                     | 2月5日                 | ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施              |
|  |                      |                                        |
| タイ<br>訪問国活動                                                                         | 2月15日<br>17:00～22:00 | 成果発表会、サマリー・フォーラム準備                     |
|                                                                                     | 2月16日<br>9:30～11:30  | 成果発表会                                  |

## 2 ディスカッション活動・各グループのレポート

### (1) 質の高い教育

ファシリテーター：

PY：28名

#### A. 目標と期待される成果

- ASEAN各国及び日本における多様な教育制度、実践、ならびに課題に対する理解を深める。
- 個々の教育経験の共有を通じて、共感力及び異文化理解が強化される。
- 包摂的かつ質の高い教育を実現する上での構造的、経済的、社会文化的な障壁に対する認識が広がる。
- テーマ別の議論及びグループでのアイデア創出を通じて、批判的思考力、創造性、ならびに協働的な問題解決能力が高められる。
- 青年主導による地域の教育活動を企画・推進する意欲と自信が高まる。
- SDG 4「質の高い教育をみんなに」の推進に向けた共通の責任意識が育まれる。
- 青年が地域及び国際社会において教育分野の提唱者及び変革の担い手として行動する力が高められる。
- 教育を生涯にわたり続く包摂的かつ変革的な営みとして捉える意識が培われる。

#### B. プログラム

##### 導入セッション：質の高い教育に関する議論の導入と基盤

###### 目的

- PYとファシリテーターの間に信頼関係を構築する。
- ディスカッション・グループの目的、進め方、及び期待される姿勢について共有し、セッション全体の方向性を示す。
- テーマである「質の高い教育」を紹介し、今後のセッションの流れを説明する。
- 安全で互いを尊重し合い、協働的に学ぶことができる学習環境を整える。

###### 内容

- オープニング・アイスブレイク**：名前を使ったダイナミックなゲームや「教育」をテーマとしたヒューマンビンゴを実施し、PYが互いに交流しやすい雰囲気をつくる。
- ファシリテーターによる挨拶**：ファシリテーターが自己紹介を行うとともに、ディスカッション・グループの目的、テーマ、セッションの構成について概要を説明する。
- 期待の共有**：PYがペアとなり、本事業に対する期待や懸念について話し合う。その後、重要なキーワードを

全体で共有し、ファシリテーターがそれらを整理してグループの期待や価値観、共有の行動指針（ハウスルール）としてまとめる。

- テーマ・マッピング**：「質の高い教育」から連想する言葉やイメージを付箋に書き出す。その後、それらをグループ化しながら全体で共有し、参加者が持つ前提や多様な視点を明らかにする。
- 質疑応答及び確認**：運営面やテーマに関する疑問について、自由に質問できる時間を設ける。
- クロージング・サークル**：現在の気持ちや今後のセッションに期待することを一言で共有し、セッションを締めくくる。

##### グループ・ディスカッション I：国境を越えた教育の実現 マッピング

###### 目的

- ASEAN各国及び日本における教育の現状について、多様な事例や視点を共有する。
- 各国の教育制度や社会状況の中で見られる構造的な課題及び革新的な取組を明らかにする。
- 個人及び国家レベルの経験や物語を通じて、異文化理解を深める。
- 今後のセッションの議論の方向性を導くための共通のテーマや論点を見出す。

###### 内容

- セッション導入**：簡単なエナジャイザーまたは「教育はあなたの国にとって何を意味するか」という問いを用いたクオート・プロンプトを行い、セッションを開始する。
- 3分間の概要発表（スナップショット・プレゼンテーション）**：各PYが事前課題をもとに、自国の教育制度の概要、主な課題、革新的な取組などの主要なポイントを3分間で紹介する。スライドやビジュアル資料の使用は任意とする。
- ファシリテーターによる整理**：各国の発表を踏まえ、共通点や相違点を整理し、主要な論点をまとめる。
- 小グループでの振り返り**：少人数のグループに分かれ、教育における不平等や革新的な取組について、PY自身の経験をもとに議論する。
- 全体共有**：各グループが議論から得られた主な気づきや視点を全体で共有する。

- ・ **共同マインドマッピング**: PYがキーワードを出し合い、教育分野における共通の課題、機会、論点をまとめたマインドマップを作成する。このマップは、今後のセッションにおける議論の参考資料として活用する。

### グループ・ディスカッションⅡ - 学習の障壁 - 周縁からの声

#### 目的

- ・ ASEAN各国及び日本の文脈において、教育に影響を与える構造的、社会経済的、文化的な障壁について検討する。
- ・ 先住民族の青年、女子、障害のある子ども、農村地域の学習者など、周縁化されやすい立場にある学習者の実体験や視点に焦点を当てる。
- ・ 共感力、批判的認識、そして異文化間の連帯意識を育む。
- ・ 教育に関する課題を単なる問題として捉えるのではなく、青年が主体的に関わり、解決に取り組むことのできる社会的課題として捉え始める。

#### 内容

- ・ **動画・ケーススタディ視聴**: ファシリテーターが選定した短い動画やストーリーを視聴し、周縁化された青年が直面する教育アクセスの課題を紹介することでセッションを開始する。
- ・ **国籍混合グループでのディスカッション**: 国籍が混ざるようにグループを編成し、PYがそれぞれの国における教育排除に関する実際の事例や経験を共有する。
- ・ **グループ課題**: 各グループは教育における主要な障壁を三つ特定し、その根本的な原因を分析する。その結果を、チャートや簡単な図などのビジュアルを用いて発表する。
- ・ **ファシリテーターによる整理**: 各グループの発表を踏まえ、地域全体に共通する傾向やパターンを整理し、議論をまとめる。
- ・ **リフレクション・ライティング**: PYは、これまでに自身が経験した、または目撃した教育における排除の事例について短い振り返りを書き、それに対して青年主導で実行できる一つのアドボカシー（提言・行動）を提案する。

### グループ・ディスカッションⅢ: ギャップを埋める～地域のイノベーションと生涯学習

#### 目的

- ・ ASEAN各国及び日本における、草の根レベルで実施されている成功した教育の取組を紹介する。
- ・ 青年主導のプログラムや生涯学習の取組が果たす役割について考察する。
- ・ 教育格差の解決に向けて、創造的な発想を促す。
- ・ 教育へのアクセス向上、公平性の確保、持続可能性の促進に寄与する、地域に根ざした革新的な取組や他地

域でも応用可能なモデルを特定する。

#### 内容

- ・ **ファシリテーターによるインプット**: 包括的かつ革新的な教育の取組に関する二つの短いケーススタディまたはミニプレゼンテーションを紹介する（例: 移動図書館、インフォーマルな学習拠点、テクノロジーを活用した教育アクセス向上プログラムなど）。
- ・ **国籍混合グループでのブレインストーミング**: PYは国籍混合のグループに分かれ、それぞれの地域や国で見られる類似の教育イニシアティブについて議論する。
- ・ **グループ共有**: 各グループは、影響力のある教育イニシアティブの事例を一つ紹介し、その有効性、拡張可能性、持続可能性の観点から評価を行う。
- ・ **統合的対話**: ファシリテーターが議論を促進し、成功要因や実現を支える主要な条件など、共通して見られるポイントを整理する。
- ・ **アイデア・スケッチング**: 共有された事例を参考にしながら、PYは将来的に取り組み得るプロジェクトのアイデアを簡単にスケッチし始める。

### グループ・ディスカッションⅣ: 青年主導の包摂教育ソリューション

#### 目的

- ・ SDG4に関連する、プログラム終了後に実施可能なプロジェクトアイデアの立案を促す。
- ・ 教育に関する実際の課題に対して、デザイン思考の手法を活用する。
- ・ 協働、問題解決、プロジェクト計画立案に関する能力の向上を図る。
- ・ 異文化間のチームワークを通じて、地域社会に根ざしたアイデア創出を促進する。

#### 内容

- ・ **デザイン思考の導入**: ファシリテーターが、共感マップ、問題ツリー、ステークホルダー分析などの主要な概念について、簡単なビジュアル資料を用いて説明する。
- ・ **国籍混合グループでの作業**: PYは多様なメンバーで構成された小グループを形成し、共通の教育課題を特定したうえで、それに対応する青年主導のプロジェクト案の共同作成を開始する。
- ・ **中間アイデア共有**: 各グループは作成途中のプロジェクト案を発表し、他の参加者やファシリテーターからフィードバックを受ける。
- ・ **フィードバックの統合と計画の改善**: 得られた意見を踏まえてプロジェクト案を改善し、地域社会の主体性、持続可能性、地域への適応可能性といった観点について検討を深める。
- ・ **セッションの締めくくり**: プロジェクト設計のプロセスについて、簡単なリフレクション・ジャーナルを記入し、振り返りを行う。

## グループ・ディスカッションⅤ：コミットメントのマニフェスト～青年の行動を通じて未来を形作る

### 目的

- これまでの全セッションで得られた主要な学びを整理・統合する。
- 教育分野におけるアドボカシー活動への個人及びグループとしてのコミットメントを強化する。
- 青年主導の教育イニシアティブへの長期的な関与と継続的な行動を促す。

### 内容

- **オープニングサークル**：簡単なエナジャイザーを行った後、PYがこれまでの学びの過程を一言で表現し、共有する。
- **グループプロジェクト最終発表**：国籍混合グループごとに、教育分野のプロジェクト案について、完成した5分間のピッチ形式で発表を行う。
- **共同リフレクションサークル**：「セッションの中で最も印象に残ったことは何か」「事業終了後にどのような行動を起こしたいか」といった問いを基に振り返りを共有する。
- **青年教育マニフェスト作成**：各PYが一つの具体的な行動宣言を書き、それを共同のデジタル「青年教育マニフェスト」に加える。ファシリテーターがいくつかの印象的な宣言を読み上げる。
- **クロージング及びメッセージ**：ファシリテーターが激励の言葉を述べ、集合写真の撮影やメッセージカードの交換などの象徴的な活動を通じてセッションを締めくくる。

## 評価セッション

### 目的

- これまでの学習の過程及びグループ内のダイナミクスについて振り返る。
- ディスカッション・セッション全体について、体系的なフィードバックを共有する。
- 個人及びグループとしての今後の成長に向けた課題や可能性を明らかにする。
- これまでの活動で達成されたグループの成果や節目を共に祝い、共有する。

### 内容

- **オープニング活動「成長のタイムライン」**：PYはDGの活動を通じた自身の経験を振り返り、特に印象に残った出来事や達成感を得た瞬間、あるいは困難を感じた瞬間を共有のタイムライン上に記入する。その後、全体でその傾向や共通点について話し合う。
- **ファシリテートされながらのグループ振り返り**：セッションの中で効果的であった点、直面した課題、そしてそれらをどのように乗り越えたかについて、ファシリテーターの進行のもとで議論を行う。

- **個別評価**：PYは、セッション内容、ファシリテーション、グループダイナミクス、自身の貢献度などについて評価する簡単な記述式のアンケートに回答する。
- **ピア・シャウトアウト**：各PYが、他のメンバーの貢献や努力を称える短いメッセージを書き、読み上げる、または交換する。
- **グループへの感謝とフィードバック**：ファシリテーターが各PYに対して個別に感謝とフィードバックを伝え、プログラム終了後も継続して関わり続けることを促す。

## 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

### 目的

- ディスカッションの内容を総括し、プログラム終了後に向けた提案を最終化する。
- 成果発表に向けた準備を行う。
- グループとしての発表練習を通じて、効果的な伝達方法を身につける。
- 発表内容において、すべての参加者の意見や視点が適切に反映されていることを確認する。

### 内容

- **オープニング・ブリーフィング**：DG発表及びサマリー・フォーラムの形式と期待事項を再確認する。その上で、発表者、資料作成担当、タイムキーパーなどの役割分担を決定する。
- **サマリーレポートの作成**：PYはチームに分かれ、用意されたテンプレートを活用しながら、DGの議論の要点及びプロジェクトの成果をまとめたサマリーレポートを完成させる。
- **発表練習と改善**：発表リハーサルを行い、参加者同士及びファシリテーターからのフィードバックを受けながら、話の流れ、内容の明確さ、時間配分などを調整し、発表内容を洗練させる。
- **コンティンジェント内での調整**：各国代表者が自国の発表内容と整合性を図るための時間を設ける。DGでの議論内容と国別発表の内容との調和を確認する。
- **最終確認と締めくくり**：会場、機材、服装などの運営面を最終確認し、必要に応じて配布資料を準備する。最後にファシリテーターから激励の言葉を伝え、セッションを締めくくる。

## C. 成果発表会

PYのみで準備・実施された10分間の構成的なプレゼンテーションを通じて、ディスカッション成果を発表した。発表では、これまでの議論を通して得られたグループの振り返り、地域における教育課題の分析、青年主導のプロジェクト提案、そして共同で作成したマニフェストが総合的にまとめられた。

発表はまず、DG 1の議論を持続可能な開発目標（SDGs）の目標4「質の高い教育」の文脈に位置付けることから始

まり、包摂的で公平な教育及び生涯学習の機会を推進するという共通のコミットメントが強調された。そのうえで、議論を通じて導き出された三つの基本原則が示された。

1. **アクセシビリティの重要性**: 教育は、背景に関係なくすべての人にとって手頃で利用可能であるべきである。
2. **教育内容の関連性**: 学びは理論にとどまらず、実社会で活用できる実践的なものである必要がある。
3. **地域社会に根ざしたアプローチ**: 教育制度は、地域社会の実際のニーズに応える形で設計されるべきである。

続いて、質の高い教育が貧困の連鎖を断ち切り、経済的機会を拡大し、国家の持続的発展を支えるうえで重要な役割を果たすことが強調された。

発表の重要な部分では、ASEAN諸国及び日本に共通して見られる教育の課題が整理された。これまでのDGセッションでの議論を踏まえ、PYはこれらの課題を構造的及び社会的背景に基づく問題として分類し、以下のような要因を挙げた。

- 自然災害による学校教育や教育インフラの中断
- 教育改革の実施不足及び限られた財政支援
- 交通費や学費、教材費を負担できないことによる貧困の影響
- 言語の違いによる理解度や授業参加への障壁
- 農村地域における教育インフラや通信環境の不足
- 特別な教育的支援を必要とする学生への制度的支援の不足
- 教員研修や専門能力開発の機会の不足
- 長時間労働による教員の過重負担

これらの課題を体系的に整理して提示することで、個別の体験共有から、地域全体に共通する傾向の把握及び構造的な分析へと議論を発展させたことを示した。

発表の後半では、課題の分析から具体的な行動提案へと焦点が移された。教師と学習者の双方の課題に対応する青年主導の取組を紹介した。

教師を対象とした取組としては、以下の例が挙げられた。

- **E2E Globally**: オンライン協働を通じて教師同士の交流を促進し、青年の支援とデジタル技術を活用して教育実践の共有を図るプログラム
- **Level Up**: ワークショップやデジタル教材の制作を通じて、教師がカリキュラム改革に適應することを支援する取組

学習者を対象とした取組としては、以下の例が提案された。

- **ABC for Youths**: 啓発型ブートキャンプやピア教育を通じて、低所得層の青年のエンパワメントを図るプログラム

- **Circle Foundation**: 栄養、持続可能性、教育を結びつけた循環型アプローチを取り入れた教育活動
- **P.I.C.K.S. Program**: 農村地域の学生とメンターを結びつけ、キャリア形成を支援する取組
- **PEERendship**: 学生のモチベーション向上やメンタル・ウェルビーイングを支える安全な交流空間を提供するプログラム

これらの提案は、質の高い教育の実現には学習者、教師、そして地域社会という複数のレベルでの支援が必要であるというDG1の認識を示すものであった。

発表の最後には、DG1による青年教育マニフェストが示された。

「教育は優先されるべきものであり、その実現には自らの意思と自信から始まるコミットメントが必要である。」

このメッセージは、教育変革は個人の主体的な行動から始まり、それが共同の取組によって支えられるべきであるという共通理解を表している。結びに、青年と経験豊かなリーダーの双方が協働し、包摂的でアクセス可能かつ公平な教育システムの構築に取り組むことの重要性が呼びかけられた。

成果発表は、内容の一貫性とPYによる主体的な関与を示すものであり、SDG4の理念とも明確に整合していた。本発表は、PYが個人的な経験の共有から出発し、体系的な分析と具体的な提案へと議論を発展させる能力を有していることを示すものであり、地域における質の高い教育の推進に向けた青年主導の実践的提案を提示する機会となった。

#### D. ファシリテーター所感

「質の高い教育」をテーマとしたDG1は、SSEAYPにおけるディスカッション・グループが単なるプログラムの一部ではなく、内省、対話、そして責任意識が交差する形成的な学びの場であることを示した。

セッションを通して、PYには段階的ではあるが明確な変化が見られた。当初は各国の状況に基づいた個別の視点から議論が始まったが、次第に地域全体を見据えた共通の認識へと発展していった。PYは教育制度の紹介にとどまらず、構造的な障壁を問い直し、最終的には共感と責任意識に基づいた現実的な青年主導の取組を構想するに至った。

特に印象的であったのは、PYが教育の課題の複雑性に真摯に向き合った点である。彼らは質の高い教育を単なるアクセスの問題として単純化することなく、また個別の課題として切り離して捉えることもしなかった。貧困、ガバナンスの課題、教員の負担、教育インフラの格差、言語の壁、メンタルヘルスの問題、政策実施の弱さなどが相互に関連する現実であることを認識していた。さらに重要なこととして、PY自身がこれらの教育システムの中

に位置する存在であり、単なる観察者ではなく、将来的に関与し貢献していく主体であることを自覚していた点が挙げられる。

DG1の強みは、提案されたプロジェクトや最終発表の内容だけにあるのではなく、その議論のプロセスそのものにあった。議論は常に相互尊重と開かれた姿勢のもとで行われ、時間の経過とともに共同の責任意識が育まれていった。各国の教育制度の違いは対立を生むものではなく、むしろ分析を深め、地域的な連帯意識を強める要素として機能していた。

ファシリテーターとして観察する中で、適切な構造と対話の場、そして信頼が与えられたとき、青年は抽象的な議論に終始するのではなく、むしろ明確性、実践性、そして社会への具体的な貢献を志向することが明らかになった。DG1から生まれた青年主導の取組は規模としては控えめであるものの、その目的は非常に意義深いものである。これらの提案は、持続的な変化が多くの場合、地域社会に根ざした小さな行動から始まるという成熟した理解を反映している。

また、本ディスカッション・グループはSSEAYPとい

うプログラムの意義を改めて示すものでもあった。本プログラムは、多様な背景を持つ青年が安全な環境の中で前提や固定観念を問い直し、互いの現実を共有し、共通のコミットメントを形成する機会を提供している。DG1において築かれた関係性や共同で作成されたマニフェストは、こうした議論の成果が事業期間を超えて広がっていく可能性を示している。

最終的に、DG1は一つのシンプルでありながら重要な原則を示した。すなわち、質の高い教育は政策宣言や制度改革だけによって実現されるものではないということである。それは、行動し、協働し、継続して努力する意思を持つ個人の存在によって支えられるものである。DG1のPYは、このプログラムを通して単なるアイデアだけでなく、教育は個人の責任であると同時に社会全体で取り組むべき共同の課題であるという確信を得て、この経験を持ち帰ることになる。

彼らの成長を見届け、この学びの過程に同行する機会を得られたことは、ファシリテーターとして大きな栄誉であった。

---

## (2) 経済成長及び持続可能で責任ある観光

---

ファシリテーター：

PY：32名

### A. 目標と期待される成果

- PYは、持続可能で責任ある観光が、ASEAN及び日本における包摂的な経済成長、文化保全、環境保護にどのように貢献するかについて、包括的に理解を深める。
- PYは、協力して文化間の対話に積極的に取り組み、好事例を共有するとともに、実際の観光課題に取り組み、包摂的發展に向けた若者主導の解決策を共に導き出す。
- 体験型学習及びチームベースの活動を通じて、PYは政策提言能力、プロジェクト設計力、ならびに地域社会参画プログラムや企画力を強化し、各自の地域において意義ある事後活動を開始するための基盤を築く。

### B. プログラム

#### 導入セッション

##### 目的

- ディスカッション・グループのテーマを紹介し、有意義な議論に向けた雰囲気を醸成する。
- 異文化交流及び共有する価値観を通じて、PY間の信頼関係を構築する。
- 安全で包摂的かつ協働的な学習環境を確立する。

##### 内容

- DGテーマへの歓迎と導入：ファシリテーターより、「日本・ASEAN友好協力に関する共同ビジョン・ス

テートメント」の実施計画に基づき、本テーマが日・ASEAN関係及びユース・アクションにどのように関連しているか、短いプレゼンテーションを実施

- **アイスブレイク「日本・ASEANを巡る旅」**：各国のPYが、自国の歌やダンスを披露した。セッションへのエネルギーを高め、互いの文化への好奇心を育む。
- **期待値のマッピング**：5名の混合グループに分かれ、付箋に「個人の目標」「グループへの期待」「ファシリテーターから学びたいこと」の3点を記入
- **DGの基本ルールと共有価値観の策定**：ディスカッション・プログラム全体を通じて、互いに敬意を払った対話と協力を行うための指針として、参加者全員で「グループ憲章」を作成
- **活動全体の流れ (DGジャーニー) の概説**：ファシリテーターより、全6セッションの流れ、最終的なアウトプット (成果物)、及びプログラム終了後の目標について説明

#### グループ・ディスカッション I

##### 目的

- 日・ASEAN地域において、観光がいかに包摂的な経済成長と持続可能性 (サステナビリティ) に寄与しているかについて理解を深めること
- 各国独自のストーリーをレンズとして活用し、持続可



能な観光における共通の課題、価値観、そして機会を特定すること

### 内容

- **セッション・オープナー「観光スローガン・ジングルショー」**：各国の代表が自国の公式観光スローガン（例：「Wonderful Indonesia」「Love the Philippines」「Amazing Thailand」等）を紹介し、そのスローガンをういた30秒のジングル（短い歌やパフォーマンス）を披露。この共有により、セッションの熱気が高まっただけでなく、日本とASEANにおける観光ブランディングの重要性和認識を深める機会となった。
- **事前課題の紹介**：ファシリテーターより、事前課題「私の地域における観光：そのインパクト」の目的と、それがディスカッションのテーマやセッションとどのように連動しているかについて説明
  - **観光ポストカード交換**：各国の代表が事前課題の発表（各最大5分）を行った。地元の観光スポットを紹介し、それが経済・文化・環境に与える影響や、持続可能で責任ある観光といかに合致しているかを共有
- **混合グループによる振り返り**：国をまたいだ混合グループに分かれ、以下の質問に沿って発表内容を振り返り。
  1. 各国共通の課題や価値観は何か？
  2. どのようなチャンスやギャップが見受けられたか？
- **テーマ別マッピング・アクティビティ**：グループ内で、得られた洞察を以下のカテゴリーに分類したテーマ別ポスターを作成
  1. 強み（うまくいっている点）
  2. ギャップ（不足している点、または課題点）
  3. 希望（改善を期待する点）
- **ギャラリーウォーク&総括**：全グループがポスターを会場内に掲示。PYは「ギャラリーウォーク」形式で各ポスターを見て回り、メモやリアクションを残しながら、最も優れたポスターを選出。その後、顕在化した地域テーマについてファシリテーターから短い総括を行い、トリオ・リフレクション（三人一組での振り返り）
- **クロージングと次回の予告**：ファシリテーターがセッションを締めくくり、PYが振り返りを共有。グループ・ディスカッションⅡでは「問題樹分析」を用いて、地域の主要な課題を特定することを確認

### グループ・ディスカッションⅡ

#### 目的

- ASEAN諸国及び日本における、観光に関連する共通の課題や問題点を特定すること
- 共同分析を通じ、これらの課題の根本原因と波及効果を分析すること
- 得られた知見をまとめ、共通認識を作り、将来的な解決策の構築やプロジェクト立案の指針とすること

### 内容

- **セッション・オープナー「観光のリアル・トーク」アイスブレイク**：ファシリテーターが観光に関する一連のステートメント（例：「観光は常に地域社会に利益をもたらす」など）を読み上げる。PYは、自分の考えに合わせて「賛成」「反対」「どちらとも言えない」と書かれた会場の隅へ移動。これにより批判的思考が刺激され、より深い分析への土台が築かれる。
- **振り返りとフレーミング**：ファシリテーターが前回セッションの成果と本セッションを関連付けた。「観光ポストカード交換」で得られた主な学びを再確認し、分析ツールである「問題樹」を紹介
- **問題樹マッピング（混合グループ）**：国をまたいだ混合グループを編成した。各グループは前回のセッションで挙がった観光課題（例：オーバーツーリズム、住民参加の欠如、文化の衰退など）を一つ選び、以下の要素を特定する「問題樹分析」を行う。
  - 根：根本的な原因
  - 幹：中心となる問題点
  - 枝：目に見える影響や結果
 各グループは、大きな用紙にクリエイティブな樹のイラストを描いてまとめる。
- **問題樹のグループ発表**：各グループが作成した樹についてプレゼンテーションし、分析の内容やなぜその課題が自分たちの文脈において重要なかを説明
- **課題概要の執筆**：発表後、続くセッションでプロジェクト案作成に活用するため、各グループは選択した観光課題を要約した3～5文の課題概要を作成
- **発表**：各グループが作成した問題樹と課題概要を全体に発表。PYは他のチームがどのようにトピックにアプローチしたかを熱心に聞いて考察
- **最後の振り返りと次回予告**：PYは、本セッションを通じて得られた気づきや疑問を一つずつ共有。最後にファシリテーターから次回セッションの予告をし、クリエイティブな解決策と責任ある観光の推進に焦点を当てることを伝達

### グループ・ディスカッションⅢ

#### 目的

- 責任ある観光を推進する、青年主導及び地域主導の実践例を模索すること
- 持続可能な旅行行動を促すために、創造的なコミュニケーション戦略を適用すること
- 本事業の全行程を通じて、PYが責任ある観光の推進者となるよう後押しすること

### 内容

- **セッション・オープナー**：議論の背景を提示するため、二つの観光キャンペーン動画（ニュージーランド政府観光局の「100% Pure New Zealand」と、フィリピン・

カミギン島の「No Words」)を紹介。両キャンペーンとも、地域社会の参画、包括性、持続可能性、そして環境や文化的伝統への敬意という強いテーマを打ち出している。

- **動画へのフィードバックとリアクション**: PYは二つの観光キャンペーン動画から得た個人的な感想や重要な気づきを共有。特に、それぞれの動画が伝える価値観、メッセージ、そして感情的な側面に焦点を当てる。
- **「倫理的かつ責任ある観光」フレームワークの紹介**: 世界観光機関による「世界観光倫理憲章」及び「責任ある旅行者のためのヒント」の概要を紹介。これにより、PYは共通の倫理的枠組みと、責任ある旅行行動のための具体的な指針を得る。
- **好事例のブレインストーミング (混合グループ)**: 混合グループによるディスカッションでは、以下の質問をガイドとして、自国の事例や個人の旅行体験から得た例を共有
  - 責任ある観光行動や政策の優れた事例にはどのようなものがあるか?
  - 青年、地域社会、あるいはインフルエンサーは、観光の持続可能性の推進にどのように貢献してきたか?
- **船上キャンペーン・チャレンジ**: 本セッションのメインアクティビティとして、にっぽん丸に乗船している他のPYに向けて持続可能な習慣を促すことを目的にした「責任ある旅行」キャンペーンのデザインに取り組む。
- **クリエイティブ開発**: PYはまず個々にポスター案とスローガンを作成し、その後、混合グループでの協働を通じてそれらを集約し、統一したキャンペーン・コンセプトを作成
- **グループ発表**: 各グループがキャンペーン・コンセプトを発表し、主要なメッセージ、クリエイティブな要素、そして期待される行動変容のインパクトについて説明
- **三人組での振り返り**: セッションの最後には三人組での振り返りが実施され、PYは少人数の落ち着いた環境の中で、活動を通じて得られた気づきや個人的な学び、印象に残った点について共有

#### グループ・ディスカッションIV

##### 目的

- プログラム期間中に特定された課題に取り組むための、事後共同プロジェクトを協力して立案すること
- SSEAYP終了後の実施に向け、青年主導で包摂的、かつ文化に根ざしたプロジェクト戦略を策定すること

##### 内容

- **セッション・オープナー「問題から可能性へ」**: 前回セッションで作成した「問題樹」と「課題概要」からいくつかの主要な課題を振り返り、「これが問題だとしたら、

責任ある若者は次に何をすべきか?」という問いを投げかけた。

- **プロジェクト・キャンパスの導入**: 事後共同プロジェクトを構築するための指針となる「プロジェクト・キャンパス」の構成を紹介。主な構成要素は以下の通り
  - プロジェクト名と目標
  - 対象となる受益者
  - 主な活動内容とタイムライン
  - ステークホルダー及びパートナー
  - 期待される成果と成功指標
- **グループ編成とブレインストーミング**: 各グループは、これまでのセッションの成果物(観光ポストカード、問題樹、責任ある観光キャンペーン)を見直し、取り組むべき中心的な課題や機会を特定
- **プロジェクト・キャンパス・ワークショップ**: 各グループはPCを使用してプロジェクト・キャンパスを完成させ、アイデアを実際に実行可能なプロジェクトへと洗練させるための共同作業を行う。
- **チェックポイント&ピア・フィードバック**: 各グループは作成したキャンパスを発表し、「強みは何か?」「不明瞭な点は何か?」「より現実的あるいは包摂的にするには何が必要か?」というシンプルな形式で互いにフィードバックを行う。
- **最後の振り返りと次回予告**: 三人組での振り返りを行い、次回のセッションで行われる「提案発表会」の準備のため、全体を二つの大きなグループに分ける。

#### グループ・ディスカッションV

##### 目的

- ディスカッション・グループで考案した「事後共同プロジェクト」を完成させ、披露すること
- プロジェクトの提案発表を通じて、パブリック・スピーキング、啓発活動、及び創造性を養うこと
- 各PYがプログラム終了後の具体的なアクションを宣言し、個人の責任感を促すこと

##### 内容

- **セッション・オープナー「ピッチ・ウォームアップ」**: プロジェクト・グループに分かれ、自分たちのプロジェクトを「15秒以内・1文」で伝えるために発表練習。テンポの良いピッチ練習により、DG全体の活気が高まり、本番のプレゼンテーションに向けた緊張をほぐす。
- **提案発表会準備**: 明快さ、創造性、及び聴衆の関心を確実に引き出すため、各グループに提案発表を精査する時間を提供。発表形式は、スライド資料、短い寸劇、動画、インフォグラフィックス、各国の文化を取り入れた演出等が見られた。
- **提案発表会 (事後活動共同プロジェクト発表会)**: 各グループが5分間の持ち時間で、事後共同プロジェクトのピッチを行う。プレゼンテーション中、PYは互いに

熱心なサポートと声援を送り合った。

- **リフレクション&プロジェクトのハイライト(専門分野別サークル)**: PYは各専門分野(経済学者、教師、観光実務家、法律家、メディア・芸術関係従事者、大学生等)でグループに分かれた。各グループでは、専門的な視点からプロジェクト案を振り返り、自分たちが貢献できる点、不足している要素、協力の可能性を検討。この枠組みにより、PY一人ひとりの意見が尊重されるとともに、専門性に根ざした深い考察が可能となり、個人レベルでの事後活動への高いモチベーションへと自然につなげることができた。

## 評価セッション

### 目的

- ディスカッション・グループにおける個人及びグループ全体の学習プロセスを振り返ること
- 内容、ファシリテーション、及び全体的な経験についてフィードバックを収集すること
- 互いの成長を祝い、築かれた絆を確かめ合い、事業終了後も継続的な協力を促すこと

### 内容

- **セッション・オープナー「DGハイライト・リール」**: ファシリテーターが全5回のディスカッション・セッションを短く振り返り、PYに対し、これまでの共有された経験、主要な学び、そして共同の成果を再確認させた。
- **個人リフレクション・ジャーナリング**: PY一人ひとりが静かに振り返り、このDGで最も意味深かった瞬間、観光やリーダーシップ、自己認識について得た洞察、そして事業終了後にどのようにインパクトを与え続けていきたいかをノートに書き留める時間を設ける。
- **ペア・シェア「私の気づき、あなたのインパクト」**: 他国のPYとペアになり、個人的な気づきと相手から感銘を受けたり学んだりした長所や貢献を一つずつ共有し、異文化間の感謝と結び付きを育む。
- **ディスカッション・グループ評価アクティビティ**: セッション内容の妥当性、ファシリテーションのスタイル、参加や包摂の機会などについて、評価フォーム(紙またはデジタル)に記入。率直な意見を反映できるよう、匿名形式で行う。
- **オープンマイク「シャウトアウト&感謝」**: 自由に発言する時間を設け、PYは仲間やファシリテーターへ感謝の気持ちを伝える。感情面でも肯定的な、意味のある締めくくりを創出
- **全員で閉会「コミットメント・サークル」**: クロージング・サークルにおいて、PYは自身のDG体験を象徴する言葉や思い出を共有し、これまでの道のりを正式に称え合うとともに、共有されたコミットメントを再確認した。

## 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

### 目的

- DGセッションを通じて構築された主要な洞察、成果物、及びプロジェクトを統合すること
- サマリー・フォーラムに向けたグループのプレゼンテーション内容及び形式を最終決定すること
- 明確さ、自信、及び共有されたオーナーシップを確実なものにするため、DGプレゼンテーションの実施をリハーサルし、洗練させること

### 内容

- **クイックな振り返り「私たちは何をしたか?」**: ファシリテーターが、観光ポストカード、問題樹、船上キャンペーン、事後共同プロジェクト、行動宣言を含む、主要なDGの成果物の整理を主導。PYは短い振り返りを共有し、彼らの活動における意味深い瞬間を強調
- **プレゼンテーション企画スプリント**: 一つの統合されたグループとして、PYは6~8分間のプレゼンテーションの主要な内容、全体の流れ、及びクリエイティブな形式を共同で決定。ファシリテーターは、明確で説得力のある物語を構築できるよう彼らを導いた。DGはスライド作成のために四つの主要なグループに分かれ、それに応じてタスクが割り振られた。
- **役割分担**: PYは、発表者、リフレクター(内省担当)、クリエイティブ担当といった役割を自分たちの中で割り当て、一貫性を確保するためにトークポイント(話の要点)を共同で起草した。
- **練習時間と個別コーチング**: 成果発表会のリハーサルを実施。ファシリテーターは発表者に対して個別のコーチングを行い、明確さ、ペース、ボディランゲージ、及び自信についてフィードバック
- **オープンマイク「シャウトアウトと感謝」**: PYが他のメンバーやファシリテーターに対して感謝を自由に表明する場が設けられ、情緒的に肯定感のある意味深い締めくくりを創出した。
- **最終調整と視覚的チェック**: 本番に向けた準備を確実にするため、投影資料を完成させ、タイミングの確認を行い、セッションを終了

## C. 成果発表会

ディスカッション成果発表会及びサマリー・フォーラムは、2月16日にタイ(バンコク)のセンタラ・グランド・ホテル・ラプラオのボールルームにて開催された。全六つのDGが、創造的かつ思慮深く、鋭い分析に基づいたプレゼンテーションを行い、それぞれのグループのこれまでの歩みを反映させるだけでなく、プログラム全体を通じて共通する主要テーマの収束と整合性を浮き彫りにした。各グループには10分間の発表時間が割り当てられ、その後、他グループの代表者による5分間の振り返りが行われた。これにより、ディスカッション・グループ間の

相互学習と議論の統合が促進された。

発表内容は深みと一貫性の両方を示すものであり、多様なテーマ別の議論が、いかに地域発展のための広範で共通したビジョンに寄与しているかを提示した。重要な点として、サマリー・フォーラムでは、PYが事業終了後の事後活動共同プロジェクトの実施に向けた具体的な計画を表明し、未来に向けたコミットメントが強調された。これらの提案は、DGセッションを通じて得られた洞察だけでなく、プログラムを超えて継続される責任感、リーダーシップ、そして地域的なパートナーシップの強化を反映するものであった。

#### D. ファシリテーター所感

議論の内容は多岐にわたり、また各DGに対して発表形式を自由に設計する柔軟性が与えられていたことから、発表内容は活発で創造的かつ示唆に富むものとなった。質の高い教育の根本的要因の検討から、責任ある観光の推進、気候変動への対応、災害リスク管理の強化、包摂的な社会の促進、さらにはAIの影響への対応に至るまで、扱われたテーマの幅広さは非常に印象的であった。こうした多様性がある一方で、すべての議論は「日本・ASEAN友好協力に関する共同ビジョン・ステートメント」に明確に根ざし、その方向性と整合しており、全体として強い一体感が形成されていた。この共通性は、分析の深さと発表に込められた熱意の双方において顕著に表れ

ていた。

環境及び気候変動に関する考察は、私たちのディスカッション・グループにとって特に強く共感を呼ぶものであった。猛暑や海面上昇といった現実、気候変動への対応が極めて身近で差し迫った課題であることを改めて認識させるものであった。また、環境保護にとどまらず、DG2のPYは、文化への敬意、中小零細企業へのより強い支援、そして現場レベルでの政策実施の一層の強化の必要性を強調した。これらの議論を通じて、経済成長は環境保全、文化の保護、そして包摂的な発展と両立する形で進められるべきであることが改めて確認された。

個人的にディスカッション活動運営委員会の卓越した献身と運営に対し、深い敬意を表したい。専門的で行き届いた進行、明確な指示、そしてよく構成されたプログラムの流れにより、参加者が安心して意見交換と振り返りを行うことのできる環境が創出されていた。会場には参加者による歓声、うなずき、共感の反応などが随所に見られ、真摯な参加と高い関心が感じられる活気ある雰囲気広がっていた。サマリー・フォーラムは単なる報告の場にとどまらず、参加者にとってインスピレーションを得るとともに、学びを再確認し、批判的に振り返ることのできる意義深い場となった。このような影響力があり地域的意義を持つ議論の積み重ねが、今後も継続され、ASEANと日本の協力関係のさらなる強化につながっていくことを心より期待するものである。

---

### (3) 地球環境と気候変動

---

ファシリテーター：

PY：29名

#### A. 目標と期待される成果

- ・特に都市化と開発に関連して、ASEANと日本における気候変動と生物多様性の損失という相互に関連した課題についての理解を深める。
- ・自国の環境状況を批判的に振り返り、気候と生物多様性のための行動に向けた青年主導の機会を特定する能力を強化する。
- ・地域社会における環境及び気候変動問題に取り組むための、事後活動のアイデアを提案する。

#### B. プログラム

##### 導入セッション

##### 目的

- ・グループメンバーとのラポール形成と有意義なつながりの構築
- ・共通の期待の共創と敬意を払い、包摂的で、参加型の議論の場にするためのコミットメント

- ・自身の気候感情と対処戦略の振り返り
- ・ガイド付き瞑想を通じ、気候及び生物多様性の解決策への貢献者としての役割を視覚化

##### 内容

- ・振り返り
- ・ネームリコール（名前覚え）
- ・Be-Do-Haveの原則を通じた期待設定
- ・グループ・コミットメント
- ・ミニ講義：気候感情
- ・リマインダー

##### グループ・ディスカッション I

##### 目的

- ・気候変動と生物多様性損失の主要因と影響を特定し説明する。
- ・システム思考を用いて、環境的要因と社会的要因の相互関係を分析する。

- ・ 自国及び地域の環境課題について振り返る。

#### 内容

- ・ 導入セッションの振り返り
- ・ フィールドスタディの振り返り (プロセシング)
- ・ Climate Fresk ワークショップ
  - 生物多様性の損失
  - 気候感情
- ・ 今日の主な気づき
- ・ リマインダー

#### グループ・ディスカッションⅡ

##### 目的

- ・ 気候変動の適応戦略と緩和戦略を区別する。
- ・ マルチステークホルダー会議を通じ、サステナビリティの観点 (レンズ) を用いて気候変動対策のコベネフィット (相乗便益) とトレードオフを評価する。
- ・ 気候変動対策がそれぞれの地域社会において環境保護と社会経済的発展の両方をどのように支援できるかを振り返る。

##### 内容

- ・ 振り返り
- ・ 気候変動対策ウォームアップ
- ・ ミニレクチャー：気候変動対策と持続可能性の側面に関する概要
- ・ マルチステークホルダー会議
- ・ 今日の主な気づき
- ・ リマインダー

#### グループ・ディスカッションⅢ

##### 目的

- ・ ASEAN 及び日本における、多様な青年主導または青年に関連する環境・気候ソリューションを発見する。
- ・ 現実世界の取り組みにおける成功要因、障壁、持続可能性を分析する。
- ・ 自身の文脈において、仲間のソリューションを適応、連携、または拡大するための機会を特定する。

##### 内容

- ・ 振り返り
- ・ ピア・プレゼンテーション (国別)
- ・ ワールドカフェ形式のブレインストーミング
- ・ 全体共有
- ・ 今日の主な気づき
- ・ グループ・ディスカッション中間フィードバック

#### グループ・ディスカッションⅣ

##### 目的

- ・ 自身が関心を持つ有意義な気候または生物多様性の課題について振り返る。
- ・ ターゲット層と創出したいインパクトの種類を特定する。

る。

- ・ サステナビリティと地域社会のニーズに沿った、青年主導の事後活動プロジェクトの初期コンセプトを作成する。

##### 内容

- ・ 振り返り
- ・ プロジェクト・デザイン入門
- ・ 今日の主な気づき
- ・ リマインダー

#### グループ・ディスカッションⅤ

##### 目的

- ・ 仲間やファシリテーターからのフィードバックに基づき、事後活動プロジェクトのアイデアを洗練させる。
- ・ プロジェクト実施に必要な主要リソース、パートナーシップ、次のステップを特定する。
- ・ 提案するイニシアチブを自信を持って発表し、プログラムを超えた行動にコミットする。

##### 内容

- ・ 振り返り
- ・ プロジェクト・マネジメント・ワークショップの続き
- ・ 今日の主な気づき
- ・ リマインダー

#### 評価セッション

##### 目的

- ・ ディスカッション・プログラム全体を通じた個人の学習、成長、感情の過程を振り返る。
- ・ セッション中に向上した主要な能力に基づいて自身の成長を評価する。
- ・ ファシリテーション・プロセスとグループ体験に関するフィードバックを提供する。
- ・ 個人的及び地域社会に基づいた気候変動対策の過程における具体的な次のステップにコミットする。

##### 内容

- ・ 振り返り
- ・ ディスカッション結果発表
- ・ DG3 アルファベット
- ・ 自己評価
- ・ バラ (良かった点)、トゲ (課題)、つぼみ (将来への芽)
- ・ コミットメント・サークル
- ・ 自己肯定的メッセージを象徴するアイコン (アフアメーション・アイコン)
- ・ ラップアップ

#### 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

##### 目的

- ・ 討議セッションから得られた主要な洞察、内省、及び成果物を最終決定し、整理する。

- ・ サマリー・フォーラムでの討議結果発表に向けて、共同で準備を行う。

## 内容

- ・ チェックイン
- ・ 振り返り
- ・ グループ・チェックリストの確認
- ・ 自由作業時間及びファシリテーターへの相談

## C. 成果発表会

DG 3の発表者は、以下の点を発表した。

- ・ 変化は自分自身から始まる。脱プラスチックやエレベーターの使用を控えるといった個人レベルでの行動が含まれる。
- ・ 全ての決定はアイデンティティに結びついた選択である。チェンジメーカー、リーダー、あるいは提言者は、それぞれの場面でどのように振る舞うべきか。
- ・ 気候危機は私たちの生活のすぐそばにある。気候変動の影響をほとんどPY、特にDG 3のメンバーが実感している。
- ・ 全ての感情は正当である。感情を受容し、それをアクションの原動力として活用することが重要である。
- ・ 気候変動対策は、気候変動への適応及び気候変動の緩和という形態をとることができる。
- ・ 成功している青年主導・青年主体の解決策が存在している。カンボジアの「Smiling Gecko」やベトナムの「No Plastic Mui Ne」等がその例である。

- ・ 東ティモールでの太陽光エネルギープロジェクトのようなコミュニティ活動や、SSEAYP自体の環境持続可能性を高めることを通じて、PYによる気候変動対策を起こすことができる。
- ・ リーダーとしての過程はDGで終わらない。PYのコミットメントには、個人的な気候変動対策の継続、他のコミュニティ活動へのボランティア参加、さらなる学習、及びグリーン・ジョブを探すことが含まれる。
- ・ 多くのことが起きる中で、自分が学んでいる最も重要なことについて常に内省することが重要である。

## D. ファシリテーター所感

- ・ 発表者は技術的な困難や時間的制約に直面したが、それらの問題に適応することができた。
- ・ 発表者は、準備された原稿と即興の回答の双方において雄弁であった。
- ・ ファシリテーターは時間制限について再三注意したが、それでも時間超過の問題が発生した。これは、教訓は年長者や教師から学ぶものである一方で、経験を通じてこそ最も深く学べる教訓があるということを思い出させるものである。このことは、今回のような登壇の機会における準備と練習の必要性について、発表者双方からの内省にもなっている。
- ・ DG 3の他のメンバーはプレゼンテーションを肯定的に受け止め、発表者や動画編集担当者に対して支持と感謝を示した。

## (4)防災と復興

ファシリテーター：

PY：27名

## A. 目標と期待される成果

### 目標

本ワークショップを通じて、PYは防災・減災の枠組みに関する知識を習得し、実践的なリーダーシップ及び計画立案能力を向上させる。これにより、各自のコミュニティや地域社会における防災・災害対応・復興分野で効果的なチェンジメーカーとなることを目指す。

### 期待される成果

- ・ 青年リーダーが防災・減災及び復興に関する枠組みや活動について、確かな理解を獲得する。
- ・ 他国のPYとの交流を通じて、将来のキャリアにおいてどのように防災・減災に関わることができるかを構想する。
- ・ 災害への備えに関する意識向上を目的とした、国境を越えた青年ネットワークの強化
- ・ リスク評価、災害対応計画の策定、アドボカシーに関

する実践的スキルの習得

- ・ 地域における優良事例、革新的なモデル、得られた教訓をまとめた最終報告書を作成し、SNSなどのプラットフォームを通じて発信
- ・ ユースによる誓約（ユース・プレッジ）及びネットワーク・プラットフォームを通じた、長期的な関与と協力体制の構築

## B. プログラム

### 導入セッション

#### 目的

- ・ ディスカッション活動における共通の価値観を形成する。
- ・ ディスカッション・グループの目的・構成・青年の役割・リーダーシップの重要性を理解する。
- ・ インタラクティブな活動を通じてチームワークを強化

する。

### 内容

- ディスカッション・グループの目的及び進行構成について理解を深めるとともに、防災・減災における青年の役割とユースリーダーシップの重要性について共有する。
- グループワーク：本ディスカッション・グループにおける共通のルール及びグループ内の合意事項を策定する。
- グループワーク：期待値マッピングを実施し、グループとしての期待、目標、チーム名などを整理する。
- 課題別視察に向けた事前学習を行う。
- ディスカッション活動運営委員会の会議の結果を共有する。

### グループ・ディスカッションⅠ

#### 目的

- 課題別視察の振り返り
- 防災に関する各国の視点を共有し、国家ごとのアプローチを比較すること
- 地域的な文脈及び共通の課題を特定すること

#### 内容

- 振り返り：首都圏外郭放水路の視察を振り返り、日本の防災・減災の取組から得られた教訓を整理・記録する。
- 国別発表（シンガポール、タイ、ベトナム、カンボジア）
- 各国発表に関する全体討議
- ディスカッション活動運営委員会の会議結果共有

### グループ・ディスカッションⅡ

#### 目的

- 世界及び東南アジアや日本における災害の発生パターンや傾向の概要について理解を深める。
- 防災・減災の主要概念及びその活動を理解する。

#### 内容

- ファシリテーターによる全体セッション：災害データベースと世界災害リスク報告書の共有、国連が定義する主要概念・用語の共有
- 国別発表（ブルネイ、インドネシア、マレーシア、ラオス）
- 各国発表に関する全体討議
- ディスカッション活動運営委員会の会議結果共有

### グループ・ディスカッションⅢ

#### 目的

- 防災・減災におけるステークホルダーを理解すること
- 既存の国際的枠組み及び地域的枠組みに関する基礎知識を得ること

#### 内容

- 国別発表（フィリピン、東ティモール、日本）

- ファシリテーターによる全体セッション：防災・減災に関する国際的及び地域的な協力枠組みの共有
- グループワーク：枠組みの活用方法の習得
- ディスカッション活動運営委員会の会議結果共有

### グループ・ディスカッションⅣ

#### 目的

- リーダーシップの発揮及び危機管理を理解すること
- 草の根レベルの防災従事者及びファーストレスポンス者としての複合災害及び複雑な緊急事態対応を理解すること

#### 内容

- シミュレーション演習：机上の緊急事態シナリオの提示・実践
- グループ討議：演習の振り返りにより、主要ステークホルダーの役割、好事例、課題、教訓の整理
- グループ討議結果の全体共有
- 成果発表会の発表者の選出

### グループ・ディスカッションⅤ

#### 目的

- 防災・減災における制度の設計を学ぶ。
- 防災・減災強化における技術、革新、高等教育の役割を理解する。

#### 内容

- ファシリテーターによる全体セッション：新技術・革新的解決策の事例紹介
- グループワーク：解決策の設計
- グループワークの発表及び全体討議

### 評価セッション

#### 目的

- ディスカッション・グループの成果及び結果を評価すること
- 防災・減災における青年行動計画を策定すること

#### 内容

- ディスカッション・セッションの学びとグループの振り返り
- グループワーク：防災・減災における青年行動計画の策定
- グループワーク結果の全体共有
- ディスカッショングループメンバーへの感謝の共有

### 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

#### 目的

- 成果発表会においてディスカッション結果を共有するための発表資料を作成すること

#### 内容

- 役割分担及び投影資料、発表者原稿等の作成

- ・発表資料を統合し、成果発表会に向けたリハーサルの実施

### C. 成果発表会

本ディスカッション・グループは、ASEAN加盟国及び日本が、環太平洋火山帯に位置する世界で最も災害が多発する地域の一つであることを認識した。議論においてPYは、ASEAN防災人道支援調整センター（AHAセンター）や国際協力機構（JICA）などの活動を検討し、調整、能力構築、地域レジリエンスの重要性を確認した。

各セッションの中で災害リスク、ハザード、曝露、脆弱性といった主要概念が議論され、災害が自然現象のみならず、社会的及び構造的要因によっても形成されることへの理解を深めた。また、首都圏外郭放水路、シンガポール民間防衛アカデミー、シンガポール赤十字社への視察を通じて、社会基盤の重要性、人道支援調整・専門的な災害への備えに関する実践的知識を習得した。

3日間にわたる洪水シミュレーション演習では、PYはコミュニケーション、調整、包摂的な対応計画における能力構築に寄与した。最終発表に向けた準備では、PY自身が主体的に役割を分担し、協力して成果をまとめることで、チームワークや当事者意識を発揮する姿が見られた。

成果発表の締めくくりとして、より強靱な社会を構築するための主要な次のステップとして、防災・減災教育の推進、青年によるボランティア活動の促進、関係主体間の連携強化、国境を越えた協力、そして官民パートナーシップの重要性を共有した。

### D. ファシリテーター所感

全体として本ディスカッション・グループは、災害レジリエンスは社会基盤のみによって構築されるものではなく、人、パートナーシップ、共有された責任によって構築されるものであるという共通認識を作った。ASEAN諸国及び日本の経験から学び、シミュレーション演習を実施し、行動計画を協力して策定することを通じて、PYは技術的理解及びリーダーシップ能力の双方を強化した。

本グループは、強靱な地域の構築には、国境及び世代を越えた連帯、備え、持続的協力が必要であることを再確認した。

DG4のファシリテーターを務めることは非常に意義深いものであった。PYが複雑な防災・減災の概念を実践的かつ協働的な行動へと転換できる自信を持ち、思慮深いリーダーへと成長していく姿を目の当たりにすることができた。彼らの主体性、共感力、地域的連帯へのコミットは、青年リーダーシップの育成と、より強靱で平和な未来を築くASEANと日本の協力を確かなものとする強く実感させられた。

ディスカッション活動を通じてSSEAYPが日・ASEAN地域における青年リーダーシップの育成において重要な役割を果たしていることを明確に示した。また、事後活動は、PYがプログラムで得た学びを具体的な行動へと発展させ、プログラム終了後も継続して青年のエンパワメントの推進に関わり続けるための持続的な枠組みを提供するものであることが確認された。

## (5) 社会福祉と包摂的な社会の実現

ファシリテーター：

PY：27名

### A. 目標と期待される成果

- ・ASEAN諸国及び日本における社会福祉と包摂に影響を与える、グローバル及びローカルな要因を理解すること
- ・包摂、多様性、正義、及び公平性を支援する国際的な政策や枠組みを学ぶこと
- ・地域社会が自己エンパワメントと肯定的な社会変化を成長させるための資源、知識及びスキルを構築するのを助ける上で、個人の主体性と声を見出すこと

### B. プログラム

#### 導入セッション

##### 目的

- ・PY間の信頼関係を築くこと
- ・グループ内における背景、視点、及び経験の多様性を尊重すること

- ・グループの目的及び目標を確立すること

##### 内容

- ・アイスブレイクの実施
- ・精神及び感情のセンタリング
- ・チームビルディング・ゲームの実施
- ・信頼とつながりを築くためのPYによる自己紹介
- ・個人の目標、学習意図、社会変革への夢及び志の共有
- ・グラウンド・ルールの設定

#### グループ・ディスカッション I

##### 目的

- ・協力的かつ肯定的な仲間同士の学習環境に寄与する行動様式を学ぶこと
- ・異なる文化、信念、学習能力及びワークスタイルを持つ人々と協働する方法を理解すること
- ・社会福祉及び包摂の原理と基礎を理解すること



**内容**

- ・ 効果的な仲間同士の学習及びグランド・ルールを展開
- ・ 各トピックの概要について議論
- ・ 社会福祉と包摂の原則及び目的を理解するために、事前課題に対する振り返りを共有
- ・ PYの振り返りを、それぞれの出身国における実体験やコミュニティでの観察事項と結びつける。
- ・ 学びの要点の整理、質疑応答及びグループでの振り返りを行う。

グループ・ディスカッションⅡ**目的**

- ・ 包摂性、多様性及び公平性の促進を支える政策、法律、ならびにプログラムに関する成功事例を学ぶこと
- ・ 社会福祉及び社会的包摂に影響を与える社会的、政治的、経済的、文化的、環境的要因について理解を深めること
- ・ 多様な視点、経験、価値観に対する共感力を育むこと
- ・ 困難な対話の進め方、対立の解決、ならびに創造的思考及び批判的思考の基礎を学ぶこと
- ・ 有効に機能している政策やプロジェクトを通じて、国際的及び地域的な文脈への理解を深めること

**内容**

- ・ 社会福祉及び社会的包摂に影響を与える社会的、政治的、経済的、文化的、環境的要因について議論する。
- ・ PYの出身国において社会福祉及び社会的包摂を推進している政策やプログラムの成功事例を共有する。
- ・ 社会的包摂及びコミュニティのつながりについて、異文化の視点から考察する。
- ・ 包摂と国民的アイデンティティに関する世界的リーダーのスピーチ映像を視聴し、その内容について振り返りを行う。
- ・ 小グループに分かれ、現在の社会福祉及び社会的包摂に関する政策やプログラムの課題や不足点を検討する。
- ・ 社会的イノベーション及び批判的思考を活用し、それらの課題への対応策を検討する。
- ・ 学びの要点の整理、質疑応答、及びグループでの振り返りを行う。

グループ・ディスカッションⅢ**目的**

- ・ 包摂、多様性及び公平性の原則と、それらが社会統合及び社会的結束において果たす役割について学ぶこと
- ・ 包摂及び社会福祉に影響を与える、権力、特権、インターセクショナルリティ、社会的不利益、ならびに構造的差別の相互関係について理解すること
- ・ 異文化間の理解と共感を深めること
- ・ 自己認識を養うこと
- ・ 真摯な対話を行うための勇気と信頼関係を築くこと

**内容**

- ・ プリビレッジ・ウォークを通じてPYは社会階層、特権、そして権力について理解を深める。
- ・ 包摂、多様性及び公平性に関する自身の経験や地域社会での観察について議論を行う。
- ・ 小グループに分かれ、インターセクショナルリティ、社会的不利益、構造的差別に関する異文化的視点を共有する。
- ・ プロジェクトチームを作るために社会変革に向けた取組についてブレインストーミングを行う。
- ・ 学びの要点の整理、質疑応答及びグループでの振り返りを行う。

グループ・ディスカッションⅣ**目的**

- ・ 異文化間のプロジェクトを効果的に運営するための基本的なプロジェクトマネジメントスキルについて学ぶこと
- ・ 成功する協働を実現するための要因について理解を深めること
- ・ 社会福祉、包摂及び社会的結束の文脈における、個人及び組織のリーダーシップのあり方について学ぶこと
- ・ 地域社会が前向きな社会変革を実現できるよう、必要なスキル、資源及び知識を活用し、コミュニティを活性化し、育成し、力づける方法について学ぶこと
- ・ システム思考及びシステムリーダーシップの基礎について理解すること

**内容**

- ・ 肯定的な社会変化をもたらすための、プロジェクトマネジメント、コラボレーション及びコミュニティ構築の原則を学ぶ。
- ・ 個人の信念、マインドセット、習慣、及び無意識のバイアスを認識するためにADDRESSINGフレームワークを使用する。
- ・ 社会変革イニシアチブを特定するために、関心のあるトピックに基づいたプロジェクトチームでの議論を行う。
- ・ 学びの要点の整理、質疑応答及びグループでの振り返りを行う。

グループ・ディスカッションⅤ**目的**

- ・ VUCA (不安定性、不確実性、複雑性、曖昧性) の高い環境において柔軟に対応するための考え方について学ぶこと
- ・ 適応型リーダーシップの要素を理解し、社会的イノベーションを支援するためにコミュニティの知恵をどのように活用できるかを学ぶこと
- ・ 実社会における問題解決能力及びステークホルダーと

の関係構築マネジメント能力を高めること

- ・ 社会的包摂を阻む根本的な課題や障壁を特定するためのシステム思考のツールの活用方法を学ぶこと
- ・ 国際的なコラボレーション・スキルを強化すること

#### 内容

- ・ 適応型リーダーシップの原則及び「ダンスフロア (当事者)」と「バルコニー (傍観者)」の視点を行き来する考え方についてのプレゼンテーション
- ・ 社会福祉及び社会的包摂に関するプログラムや政策に関連して、複雑な変化や不確実性の中での生活や活動の経験について、PYが共有する。
- ・ プロジェクトチームにおいてシステム思考及びプロトタイピングの手法を実践し、社会福祉及び社会的包摂を促進する社会変革の取組について検討する。
- ・ 包摂、多様性、及び公平性を促進するために、地域社会を活性化し、育成し、エンパワーした経験について、PYが共有する。
- ・ 学びの要点の整理、質疑応答、及びグループでの振り返りを行う。

#### 評価セッション

##### 目的

- ・ 個人及びグループの学びの過程を整理し、可視化すること
- ・ 概念や原則を、個人の体験や現実の状況と結び付けて理解すること
- ・ 学習の節目を振り返り、グループとしての達成を称えること
- ・ 社会的革新に関するスキルを身につけること
- ・ パブリックスピーキング及び批判的思考の能力を磨くこと
- ・ グループ学習のフィードバックを収集すること

##### 内容

- ・ 社会福祉及び社会的包摂の向上に向けた変革的取組について、プロジェクトチーム内で議論する。
- ・ 各プロジェクトチームが、自らのアイデアを全てのPYに共有するためのプレゼンテーションを行う。
- ・ 社会的包摂及び社会的結束を可能にする要因及び阻害する障壁について理解を深めるため、変革的取組に対してPY同士でレビュー及び批評を行う。
- ・ 学習の過程について個人で振り返る。
- ・ DG5 プログラム全体をまとめ、振り返るため、グループでポスターを制作する。
- ・ 学習成果を互いに祝い、自己受容と成長思考を育むため、肯定的な言葉がけと感謝の実践を行う。

#### 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

##### 目的

- ・ 個人及びグループのリーダーシップを実践すること
- ・ 異文化間のコラボレーション、役割分担、コーチング、及びチームワークを実践すること

##### 内容

- ・ 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備とリハーサルのために、PYに役割とタスクを割り当てる。

#### C. 成果発表会

PYが準備したプレゼンテーションでは、DG5における学習の過程の中で特に重要かつ大きな影響を与えた要素がまとめられた。これには、グランド・ルールの作成を通じた信頼関係の構築、リーダーシップを高めるためにより深い自己認識を育む必要性、インターセクショナル리티への理解、システム思考、VUCA環境における適応型リーダーシップなどが含まれている。また、日本及びシンガポールにおける課題別視察から得られた学びについても振り返りが行われた。PYは社会変革を導くためには、まず自らを導く力を身につけ、自身の盲点や無意識の偏見に気づくことが重要であることを学んだ。また、信頼こそが、すべての意味のある人間関係及び協働の基盤となるものであるという理解を深めた。

#### D. ファシリテーター所感

DG5のファシリテーターを務め、様々な国から参加したPYと共に活動できたことは、大きな特権であり、光栄であり、また喜びであった。DG5における多様な視点やそれぞれの体験は、大きな資産であり、社会福祉や社会的包摂に関する多岐にわたるアプローチや理解に対して、PYがオープンマインドかつ決めつけない姿勢を保つことの支えになった。各セッションを通じて、概念や理論を理解するために、信頼関係の構築、体験的学習、そして深い内省を重視した。そうすることによって、PYは概念や理論を自らの経験と結び付けることができる。また、固定観念や偏見、自身の思い込みにとらわれないよう、常に自己認識を持ち続けることの重要性についても強調した。PYにとっては、新たなスキル、知識、理論を習得するだけでなく、内面的な変容や自身のリーダーシップスタイルの見直しにも取り組むことが重要である。これにより、人工知能やデジタル技術の進展、さらには世界的な対立や分断によって大きく揺れ動く不安定、不確実、複雑、かつ曖昧な (VUCA) 環境の中で成長することができる。また、各DGセッションの後にPYが寄せてくれた非常に前向きで励ましに満ちたフィードバックは、私にとって本活動への貢献を大きく実感できる、非常に価値のあるものであった。

**(6) デジタル社会と人工知能 (AI)**

ファシリテーター:

PY: 26名

**A. 目標と期待される成果**

- ASEAN・日本全域の文脈におけるデジタルトランスフォーメーション及びAIについて、利点も含めつつ、社会における格差のリスクや課題について理解をより深める。
- 公共の利益のために、倫理的で包摂的かつ革新的な形でテクノロジーを活用するためのリーダーシップを育成する。
- 対人スキル、コラボレーション、共感力及び異文化的視点を強化する。

**B. プログラム****導入セッション****目的**

- 安全で信頼でき、包摂的なグループ環境を構築すること
- 各PYの名前、背景、及び期待を学ぶこと
- 今後のグループ・ディスカッションの流れと予想される内容を説明すること
- DG6の期待、目標、及びグループ文化を確立すること
- 現在の文脈におけるデジタル社会及びAIのテーマと関連性を簡潔に紹介すること

**内容**

- SSEAYP参加の動機や期待について振り返ることを目的としたアイスブレイク活動を実施する。
- PY主導のエナジャイザー（ジャンピングジャック）。
- グループ活動を通じて共通の価値観と行動規範を設定する。
- プログラムに対する期待を整理するためのワーク。
- 今後のセッションの概要説明と「デジタル社会とAI」に関する導入を行う。
- AIに関するクイズを実施し、テクノロジー及びAIが環境に及ぼす負の影響について振り返る。
- AI及びデジタル社会に関する知識についてグループ・ディスカッションを行う。
- 学習及び相互の責任を支え合うバディを決める。
- グループ写真の撮影

**グループ・ディスカッション I****目的**

- デジタル社会、デジタルトランスフォーメーション、及びAIの活用拡大に関する基本概念を紹介すること
- 地域における動向及び課題について考察すること
- 事前課題の振り返りを通じて、世界を形づくるテクノロジーの社会的役割について探究すること

- 信頼関係、共感、そして異文化間対話の基盤を築くこと

**内容**

- エナジャイザーを実施。
- 事前課題「Digital Stories from My Community」のギャラリーウォークを行い、各PYが自らのストーリーを紹介する。他のPYは会場を回りながら共通するテーマを見つけ、コメントや質問を共有する。
- ギャラリーウォークの振り返りとして、「私たちのコミュニティにおける現在のデジタル社会の状況はどのようなものか」という問いをもとに考察を行う。
- PYを国別または少人数グループに分け、「私たちはどのようなデジタルの未来を望んでいるのか」「私たちは何を失うことを恐れているのか」という問いについて議論を行う。その後、「イノベーション」「包摂」「プライバシー」などの観点を手がかりに、デジタル社会の価値マップを作成する。
- 国ごとに共有及び振り返りを行う。最後に、デジタルトランスフォーメーション、AIの活用、デジタル社会の概念を紹介し、本セッションを通じてPYがどのような学びを得たかを整理する。

**グループ・ディスカッション II****目的**

- 教育、気候アクション、災害対応、及びガバナンスにわたる公共の利益を推進する上での、AIの変革的な可能性を探究すること
- 現実世界のジレンマにAIを適用する際のトレードオフを理解すること
- リーダーシップ、課題解決、チームワーク、及び交渉スキルを実践すること

**内容**

- エナジャイザー（人間じゃんけんチェーン）を実施
- シナリオ型ロールプレイを実施。PYはチームに分かれて政府指導者、青年活動家、技術者などの役割を小道具を用いて担当し、架空のAI政策危機に対応する。このロールプレイは、プライバシー、効率性、公平性等の観点から、AI及びデジタル社会における様々なトレードオフを理解することを目的とする。
- ロールプレイ後、各チームが自らの意思決定及び展望を発表し、どのような要因や価値観が特定の政策判断を支えたのかを説明する。
- その後の振り返りセッションでは、ロールプレイの内容を現在の世界の状況と関連付けるとともに、AIが日

常生活に広く浸透した場合の将来のシナリオについて考察する。

- ・ 国別セッションでは、AIが自国のデジタル発展の過程にどのように関わっているか、またそれが将来にどのような影響を与える可能性があるか、もし自分たちが政策立案者であった場合どのような行動を取るかについて議論する。
- ・ セッションの締めくくりとして、マインドフルネスのエクササイズを実施する。セッション中にリーダーシップを発揮した仲間のPYに対して、感謝や称賛の言葉を共有する。

### グループ・ディスカッションⅢ

#### 目的

- ・ デジタル・エクスクルージョン（デジタル化からの排除）及びデジタル・デバイド（デジタル格差）に関する意識を構築すること
- ・ 社会的弱者に対する共感を育み、AIがいかに包摂のツールにも不平等のツールにもなり得るかを理解すること
- ・ 全員で作った「包摂宣言」を通じて、包摂的でアクセス可能なデジタルの未来を構想すること

#### 内容

- ・ エナジャイザー（PYが二人一組となり、互いに背中を合わせて立ち、腕を交差させるアクティビティ）を実施。
- ・ 共感ロールプレイ（PYが農村の農業従事者、高齢者、シングルマザー、移民労働者等の役割を演じ、テクノロジーやAIの利用において直面する障壁を疑似体験する）を実施
- ・ ロールプレイ後には振り返りを行い、感じたこと、浮かび上がった課題、そしてそれぞれのペルソナがどのように社会から取り残され得るのかについて議論する。
- ・ セッションのまとめとして振り返りを行い、グループで「包摂宣言（誰もが取り残されないための誓い）」を策定する。公平で誰もが使いやすい、デジタルや人工知能（AI）が支える未来に向けた各PYのビジョンをまとめる。その際の指針となる問いは、「誰もが参加できるAI・デジタル社会を実現するために、私たちはどのような原則を大切にすべきか？」である。
- ・ セッションの締めくくりとして、マインドフルネスのエクササイズを実施する。セッション中にリーダーシップを発揮した仲間のPYに対して、感謝や称賛の言葉を共有する。

### グループ・ディスカッションⅣ

#### 目的

- ・ 起業家的思考を身につけるとともに、現実の社会課題を特定し、それを解決するためにデジタル技術やAIをどのように活用できるかを考えるためのツールをPYに提供すること

- ・ チームワーク、創造的な問題解決能力、そして基礎的なプロジェクト設計スキルを育成すること
- ・ 建設的なフィードバックをPYが互いに提供できるよう促すこと
- ・ シンプルで地域で応用可能なイノベーションの事例を紹介すること

#### 内容

- ・ エナジャイザー（One Two Ping Four Pong）を実施。
- ・ 「問題カード・チャレンジ」を実施。PYには異なる課題が書かれたカードが提示され、「農村部の教育」「廃棄物問題」「メンタルヘルス」といった特定の課題ごとにチームに分かれる。各チームは地域を選んで一つの課題を定め、対象者を特定し、オフライン環境でも利用可能デジタル技術やAIを用いた解決策を共同で考案する。具体的には、ショートメッセージ（SMS）を活用した学習ツールや、現地の言語による音声支援等、問題解決や意識向上に役立つ手法を検討した。
- ・ 課題の検討にあたっては、ブレインライティングの手法を用いてアイデアを出し合い、問題の整理及び具体化を進める。
- ・ 各チームは5分間のピッチ形式で提案内容を発表し、他のチームは建設的なフィードバックや質問を通じて、提案のさらなる具体化を支援する。
- ・ セッションの途中では、簡単なストレッチ運動を行う。
- ・ 最後に振り返りを行う。地域を越えた多様な国の具体的な解決事例と、それらが喫緊の課題を解決するためにいかにテクノロジーを活用しているかを紹介する。ある事象が真の課題であるかを見極めることと、その課題の適切な解決策をどのように見出すかの重要性を考察する。

### グループ・ディスカッションⅤ

#### 目的

- ・ AI倫理及び青年リーダーシップに関する理解を深めること
- ・ デジタル社会の未来における価値観やジレンマについて振り返ること
- ・ 人間性、公正性、持続可能性を基盤とした未来に向けて、長期的なコミットメントを促すこと

#### 内容

- ・ エナジャイザー（アニマル・ラウンドアップ）を実施。
- ・ 「倫理的ジレンマカード」を用いたグループワークを行う。PYをグループに分け、顔認証技術、学校における成績評価のバイアス、予測技術等、実社会におけるAI及びデジタル技術に関する課題を提示する。PYは「六つの考える帽子」の手法を用いて多角的に議論し、AI及びデジタル社会における倫理的側面に焦点を当てながらグループとしての意思決定を導き出す。例えば、プライバシーの犠牲を伴う、顔認証技術の必要性

が挙げられる。

- 最後に振り返りを行い、デジタル技術やAIを活用する際に倫理的思考が重要であることについて共有する。各PYが自ら目指すリーダー像や、本セッションを通じて得た主な学びについて振り返る。

### 評価セッション

#### 目的

- DG 6における学びの過程について、PYが振り返るための体系的な場を提供すること
- ディスカッションの進め方及び内容の双方について、率直なフィードバックを収集すること
- 成果を共有して称えとともに、課題を認識し、今後の成長に向けた改善点を明らかにすること

#### 内容

- エナジャイザーを実施。
- アクティビティ「一言で表す気持ち」を行う。各PYがDG 6の全体的な学びの経験を一言で共有する。
- 評価セッションのウォームアップとして「サイレント・ライン・ドローイング」を実施する。セッションのタイムラインを記した大きな模造紙を壁に掲示し、PYがそれぞれ異なる色のマーカーを用いて、各セッションに対してどの程度楽しさや学びを感じたかを、中心線より上または下に線を描いて表現する。
- アクティビティ「期待の再確認」を行う。導入セッションで設定した期待を再度取り上げ、どの期待が満たされたか、またどのような課題が残っているかを振り返る。PYの期待がどのように変化したかについて短いディスカッションを行う。
- アクティビティ「ハイ・アンド・ロウ」を行う。グループに分かれてDGの経験における二つ～三つの印象的な点と、一つ～二つの課題を整理する。その後、各グループが全体に共有する。
- 「DG 6からPYが自分の生活、リーダーシップ、または地域社会に活かすことができるよう、何を持ち帰るのか」という問いをもとに、各PYが個人の学びについて振り返る。
- 各PYに匿名のフィードバックフォームを配布し、記述式の質問に回答してもらう。
- 最後にクロージング及びセレブレーションとして「サンキュー・アクティビティ」を実施する。PYが背中に紙を貼り、会場を歩き回りながら互いにメッセージを書き合う。
- 最終のグループ写真を撮影する。

### 成果発表会及びサマリー・フォーラムの準備

#### 目的

- DG 6の成果を発表するための準備を行うこと
- コミュニケーション及びチームワークを実践すること

- PY全体及びディスカッション活動運営委員会の前でチーム及び個人の取組を共有することに自信を持つこと

#### 内容

- ホームステイ終了後、各PYとのクイックチェックインを行う。
- ディスカッション活動運営委員会より、発表時間及び発表に関する運営上の説明を行う。
- チームで準備したプレゼンテーションの内容について簡単な振り返りを行う。
- プレゼンテーション内容についてチームごとにフィードバックを行い、必要な調整を加える。
- 発表担当者とのディスカッションを行う。
- 「包摂宣言」の内容を確認し、グラフィックデザインのスキルを持つPYの協力を得ながら必要な修正を行う。
- プレゼンテーション全体の流れを確認し、これまでの努力を称え合う。

### C. 成果発表会

ディスカッション結果の発表は、PYが企画、脚本、演出、制作のすべてを自ら手掛けた5分間の動画という形式で行った。物語は、PYが日常生活の中で「Goody AI」を活用する様子を中心に展開され、旅行、教育、社会的包摂、災害対応、そしてより効率的で賢明な意思決定など、さまざまな場面でAIが活用される様子が描かれた。

動画では、デジタル技術に精通したPYがGoody AIの助けを借りて生活をより便利にしている様子や、彼の家族も日常生活の中でデジタル機器やAIによる提案を活用している様子が紹介された。一方で、物語は「Baddy AI」というキャラクターを通じてテクノロジーの負の側面も描き出した。Baddy AIは、データ侵害、ハッキング、詐欺等、AIを不正に利用するようPYを誘惑する存在として登場し、PYがどのような選択をするべきかという倫理的ジレンマを生み出す重要な転換点となった。

このジレンマに対する答えとして、発表者の一人がセッションⅢで作成した「包摂宣言」を紹介した。このマニフェストは八つの原則から成り、AIやデジタル技術を社会の利益のために責任を持って倫理的に活用するというグループとしての誓いを示したものである。この創造的な動画より、グループはディスカッション・セッション全体を通じて議論してきた主要なテーマ、すなわちデジタル包摂、デジタル格差、AIの倫理的利用、そしてAIを日常生活に導入することに伴うリスクや課題を効果的に表現した。

また、本DGのリフレクターはDG 4（防災と復興）とペアを組み、AI及びデジタル技術が早期警報システムや災害対応にどのように活用されているかについて共有した。これにより、災害の被害を受ける可能性のある人々や、災害の予防や対応に携わる人々が、より適切に備え、迅速に対応できる可能性が示された。さらに、リフレクター

は日本で行われたSAP Japanへの課題別視察で得た経験にも触れ、音声認識、リアルタイム翻訳、課題の自動記録などの技術が早期警報システムや災害対応の強化にどのように活用されているかについて紹介した。

一方で、多くの国がそれぞれの事後活動においてデジタル社会やAIの要素を取り入れており、デジタルリテラシーの向上、デジタル包摂の促進、デジタル格差への対応などが共通のテーマとして見られた。特にベトナム及びフィリピンは、このDGテーマに強く焦点を当てた取組を計画している点が特筆される。ベトナムの発表では、国内で増加するサイバー攻撃に対応するため、サイバーセキュリティに関するデジタルリテラシー向上を目的として、2,000人以上の青年及び保護者を対象とした能力向上プログラムを事後活動の中心としていた。一方、フィリピンは「BAGANI Impact Network」におけるトークショーシリーズの主要テーマの一つとして「デジタル社会とAI」を取り上げる計画であった。

#### D. ファシリテーター所感

全体として、プログラムは円滑に実施された。時折いくつかの軽微な技術的問題が発生したものの、セッションの進行に大きな影響を与えるものではなく、PYの高い参加意欲と積極的な姿勢によってほとんど問題とはならなかった。一方で、PYの中には睡眠不足の様子が見られる場面もあった。これは日中の活動が非常に密度の高いスケジュールで進められていたことによる疲労が一因と考えられ、セッション開始時にエネルギーレベルがやや低くなることがあった。セッションはPYのエネルギーが比較的高い時間帯を想定して午前中に設定されていたが、実際には十分な休息が確保されているかどうかPYの集中力や活力に大きく影響することが示唆された。今後は、プログラム全体のスケジュール及びPYの健康や休息の確保を考慮することで、より高い集中度と参加度を維持できる可能性がある。

セッションへの参加がやや消極的であった数名のPYについては、昼食や夕食の時間を利用して個別に状況を確認した。その結果、多くの場合、英語力への不安や、

PY同士のさまざまな英語アクセントを理解することの難しさが主な要因であることが分かった。このため、PY同士が互いの理解度を確認し合い、必要に応じて話す速度を調整するよう呼びかけた。また、課題を感じていたPYには個別にフォローを行い、ディスカッションの内容を十分に理解できているかを確認した。その結果、当初困難を感じていたPYからも、最終的には議論に有意義に参加できたとの声が寄せられた。

さらに、初期のセッションではやや控えめであったPYの中にも、グループ内で親しい友人関係を築くことで徐々に自信を深め、パブリックスピーキングの面でも明らかな成長を見せる者が見られた。

振り返り及び評価セッションでは、匿名のフィードバックフォームを配布した。複数のPYからは、午前中のスケジュールや活動が密に組まれていたことにより、時折疲労を感じ、集中力に影響があったとの意見が寄せられた。また、ディスカッションの時間が2時間30分に設定されていたものの、もう少し長い時間があればより深い議論ができたのではないかという意見もあった。さらに、午後の時間帯の方がより集中しやすく活力を感じるという理由から、午後にセッションを実施することを希望する声も一部で見られた。

全体として、フィードバックからは有意義な学習成果が得られたことが確認された。PYは、デジタル包摂の重要性や、国ごとに異なるデジタル格差の現状、さらにAIの活用に伴う倫理的課題について理解を深めたと述べている。特に、特権ウォークや倫理的ジレンマに関する議論を通じて、テクノロジーを自分とは異なる立場から捉える視点を得ることができ、デジタルアクセスが限られているコミュニティへの共感が高まったとの意見が多く寄せられた。また、グループ活動を通じて、批判的思考力、協働力、そして異なる意見を尊重しながら対話する能力が高まったと評価されている。

とりわけ、PYの多くが、より包摂的で倫理的なデジタル社会の実現に向けて、若いリーダーとして自らが果たすべき責任について深く考える契機となったと述べていた。